

に試みられたる特殊の工夫について特に強調して居る。蓋しこの佛寺並びに石窟庵に關しては、その著述や寫真集等の如きも決して少くはないが、從來諸書の收むる所が或は部分的斷片的であつたり、或は配置圖の如きも不確實であつた弊を除き、現存遺跡遺物の圖集に加ふるに精密な實測圖を以てして構造全般の紹介を企て、以て學的正確を期して居る點に我々は注意しなければならぬ。尤も本寺は荒廢既に甚しいものがあり、基本調査を行はずして急ぎ修復を施した爲、今日原形の既に明かならぬ部分も生じて居るとの事であるが、本圖錄にあつては特に寫真數葉をさいて修理以前の實狀を傳へ、殊に石窟庵修復の工事過程の寫真を收めたのは、其實測圖と相俟つて構造を理解させる上にも甚だ有益な記録であつたと思ふ。

巻頭の總説は既に一言ふれた如く、悲しくも今は故濱田青陵先生の遺稿となつたものであつて、先生のあの坦々としてよどみなく、知らず／＼の内に人を引き入れて行く獨特の文章と、その平明な章句の内にも入れた溢るゝばかりの詩情とは、僅か數葉の内、或は寺院の規模を述べ、或はその創建の歴史を説くかゝる總

説の内にも自らうかゞはれて——「吐含山の西麓翠黛滴る處、松林の參差たる間に薨を連ぬる」佛國寺に遊び、「遙かに日本海の紺碧を望む斷崖の傍ら」、「山を穿ち窟を設けたる」石窟庵を訪ふ心は自ら讀者を誘ふものあると共に、この自然と人工の善美を盡した平和と神嚴の佛域を訪はれた美の人であり、直觀の人であつたことが偲ばれる。故先生を思ふ時、我々は感慨の新なるを禁じ得ないものがある。右の故濱田先生の總説について、資料の蒐集及び解説は藤田亮策氏が當られ、出版校正には梅原先生、寫真は今關光夫、澤俊一兩氏、實測には米田美代治氏が従事せられたものである。

〔岡田芳三郎〕

### 冊府元龜奉使部索引

字都宮清吉、内藤戊申共編

四六倍判、本文九九四頁、序文、檢字三

九頁、定價拾五圓、東方文化研究所發行

我々がふだん利用する史料に索引があれば便利であるといふことはあらためて申すまでもない。そしてその史料が老犬繁雜であればそれだけ、また重要であれ

ばそれだけ索引の効用が大きくなり、同時にそれを編纂する労苦が増すことも自然のことである。さう云ふ意味でこの冊府元龜奉使部外臣部索引の出版に我々は先づ深甚なる謝意を表さねばならない。

冊府元龜の史料としての價值といふ點からいへば、これが支那史、ことに唐・五代の正史の闕を補ふ上にはなほだ役にたつことはすでに故内藤湖南博士（唐蕃會盟碑に就いて）藝文九ノ二、及び研幾小録）、杉本直治郎氏（内閣文庫所藏の冊府元龜の刊本と寫本）史學研究七ノ二）および近くはこの索引の編者の一人なる宇都宮清吉氏（明版冊府元龜に就いて）本誌二ノ二）等によつて説かれてゐるから、くり返してこゝに述べる必要はないであらう。この様に重要なものではあるがその取り扱ひの極めて厄介なことは、これを利用する誰しものがなやむところである。その第一は一千卷の老大な内容が三十一部、一千一百四門（この數へ方には異論があるが）といふ繁雜きはまる分類が施されてゐることであつて、必要な記事を探し出すことはなかなか容易でなく、この部門だけのための索引さへ作られてゐる有様である。しかも同一記事が何ヶ所にも重

ねて記されてゐることは極めて普通のこと、更に厄介なことは、それ等重出記事の中には互に牴觸する場合がしばしばある。その上この書の通行本には魯魚馬の誤が多いことは、これが取扱ひを一層困難ならしめてゐる状態である。かやうなわづらはしさは索引一つありさへすれば、たやすく救はれるのである。

さてこの索引は、さきに同研究所から出された國語遼史などの索引と一連のもので、冊府元龜一千卷三十一部の内奉使部（六五—六六四卷）、外臣部（九五六一—一千卷）の二部、即ち支那の對外關係を主とした二部門についての人名、國名、地名、部族名などの個有名詞のほかは稱號、官名、夷語、術語的名辭、風俗、習慣などに關する名辭の字劃びき索引である。さきの國語索引、遼史索引と同じ様に各見出しの下には冊府元龜の本文を引用し、卷數、部門と康熙壬午重印本の葉數、行數が示されてあるが、その外に「參考」なる欄があつて、各正史または通典・唐會要などの参照を必要とする史料がその卷數と共に附記せられてある。冊府元龜を史料として用ひるに他の史料の記事と對照することが必要なのであるから、こゝに擧げられたの

はごく重要なものゝみであるとはいへ、編者等のこの用意には本書を利用するわれ／＼の負ふ所は何にもまして大きく、かゝる繁瑣な勞をあへてされたことに讚嘆感謝の念を禁じ得ない。それから「回鶻」の項には「廻紇」、「廻鶻」を、「拔曳固」の項には「九姓拔(勃)曳固」を參看するやうに注意せる如き、また、明崇禎刊本、其の他諸刊本、故内藤博士所藏の寫本によつて康

熙刊本の誤りを訂正せる如き周到な用意も見られる。本書の二二三頁までが奉使部索引、以下九九四頁までが外臣部索引となつてゐるが、この奉使部、外臣部の二部はともに支那の對外關係を扱つた部門であるから、これを二部にわけるとよりは、合せて一つにしてしまつた方が利用者にははるかに便利であつたらうと惜しまれる。

〔藤枝 晃〕